

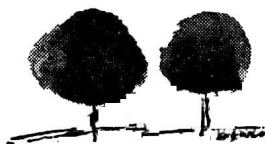
人生感あり



コンパクト・ブックス

人生感あり

源氏鶏太



コンパクト・ブックス

集英社

人生感あり

一九六七年六月二十五日 初版発行
一九七三年二月二十日 二十版発行

著者 源氏鶏太

発行者 陶山 巖

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二の五の十

郵便番号 一〇一

電話 東京(265)六一一一

振替 東京一五六五三

印刷所 大文堂印刷株式会社

著者との了解により検
印を廃止いたします。

乱丁・落丁本はお取替えいたします。
定価はカバーに表示しております。

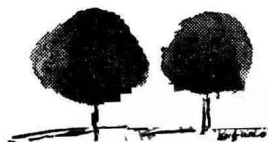
人生感あり



コンパクト・ブックス

人生感あり

源氏鶏太



コンパクト・ボックス

集英社

目次

軽い失恋……………九

波紋……………六

流れ……………二五

奔流……………一九三

風……………二四六

憤怒……………三〇

人生感あり

軽い失恋

一口に失恋といっても、重いのと軽いのとがある筈だ。軽いになるとヤケ酒でも飲んで、そのあと二、三日、憂鬱な顔をしているうちにいつの間にか癒ってしまふが、重いになると、当分どころか、十年二十年、いや、死ぬまで胸の奥底にえぐられたような傷あとが残るという残酷なものもある。

(それなら俺の失恋は、そのどっちの方であろうか)

有沢修三は、自分の胸に聞いてみて、そして、自分で答えた。

(何、ほんのかすり傷程度の軽い失恋さ)

これは必ずしも負け惜しみをいつてるのではないつもりであった。今頃、重い失恋なんて、真ッ平である。第一、そういうのは精神衛生上からもよろしくない。せつかくの青春を、ために台なしにしてしまう恐れがある。人生に二度とめぐってこない青春なのだ。せいぜい有効につかしておくことである。

(今夜、俺は、飲むぞ)

有沢修三は、これで今夜痛飲してもいい理由を見つけたことになる。嬉しかった。有りがたかった。しかし、いつもだと、今夜飲もうと決心したときには、もっと勇氣凜凜としてくるのである。が、せつかくその決心をしたのに、一向に氣持が弾んでこないのだ。寧ろ、氣持が沈んでくるようである。

(ひょっとすると、俺の失恋は、自分で考えているよりも重いのかもわからんぞ)

それでは困るのだ。しかし、いくら困ったところで、やっぱり重い失恋であつたら早急に対策を講じておく必要がある。

対策としては、一日も早くあの女を忘れることだ。そして、その手段として、酒を飲むとか、麻雀に熱中するとか、あっさり別の女を好きになつてしまふとか、ということが考えられる。いや、もっといいことがある。

即ち、仕事に身心を打ち込むのだ。これは誰が見ても立派であろう。しかも、一種の悲壯感に満ちているし、まさに男の中の男のやることである。また、仕事にそれだけ打ち込めば、上役の覚えもよくなり、出世の道が開かれてくるだろう。更にいえば、男とは仕事によって本當に鍛えられ、人間的に成長していくのだという説がある。まさに、一石二鳥どころか、一石三鳥ほどの値打ち

がある。

有沢修三は、ほんの一瞬であつたが、その氣になりかけたことはたしかであつた。ということは、有沢修三の心の底には、そういう願望のようなものが秘められてゐるからと考へてよかつたろう。しかし、有沢修三は、次の瞬間、

(あんな課長！)

と、吐き出すようにいつていた。

これは、あんな課長は大嫌いだし、あんな課長の下で誰が一所懸命に働くものか、との二つの意味がこもつていたに違ひないのである。サラリーマンにとつて、何が不幸といつても、こういう思いをしなければならぬ程不幸なことはめつたになかろう。

有沢修三の目の前には、すでに銀座の夜のネオンがそのまたたきを始めていた。

有沢修三は、二十八歳、入社四年目であつた。そろそろ仕事というものが面白くなつて来ていい頃だし、また、それに生甲斐を感じるようになってもいい筈なのである。にもかかわらず、一向にそういうふうになれないのであつた。朝起きて、会社へ行くのに張り合ひを感じたことなんか殆んどない。

しかし、三万円もの月給を貰いながらそれでは悪いの

である。時には、それも反省したことはある。しかし、自分では、これでも三万円分ぐらゐの仕事をしているつもりであつた。

勿論、何を標準にして三万円分の仕事というのかと質問されたら困る。が、有沢修三は、こういいたいのだ。

(あんな課長が十五万円からの月給を貰っているのではないか)

課長なら十五万円の月給であらうと、二十万円の月給であらうと、それにふさわしい仕事をしているのなら一向に差し支へがないのである。ただ、有沢修三は、あんな課長に十五万円の月給は、何んといつても勿体なすぎると思っているのであつた。

ロクに仕事をしない課長。

部下に威張り散らすだけで、責任を持つとしない課長。

重役の縁続きであることを鼻にかけている課長。

いや、それくらいのことにはまだ見逃がしてもいいのだ。世間によく聞く例である。が、有沢修三は、知つていた。

(あいつは得意先からリベートを強要している！)

そのことが有沢修三には我慢がならないのであつた。それも一軒や二軒からではないのである。

勿論、営業課にはリベートはつきものなのだ。有沢修三にもそれくらいのことばわかってた。彼だって、時には得意先からワイシャツとか靴下程度は貰っている。が、課長の場合は、あくまで現金主義であつた。そして、その課長の悪習が、部下の間にも徐徐にひろまりつつある傾向にあるのだ。

（こんなことでは、この会社はダメになってしまう）

有沢修三は、時にはそう思うくらいであつた。これは有沢修三の愛社精神のあらわれというよりも、今のところは人間としての潔癖感のせい、と見るべきであつたかも知からない。たかが入社四年目ぐらいでは、まだまだ一人前の愛社精神なんて養成されていよう筈がないのだ。尤も、二十年間勤めても愛社精神のカケラもないような連中だって、世間にはたくさんいるに在るが。現に、あの課長がそうだ、といったかつた。しかも、その課長が今では部長を兼務しているのである。

有沢修三が課長について、以前から臭いぞと思つてたのだが、その決定的な事実を知つたのは今から一年ほど前であつた。

S工業との取引が終つたあとで、その社長が、「どうぞ、これを。」

と、有沢修三の前に一通の封筒を差し出した。

「何んですか、これは。」

有沢修三は、いぶかるようにいつた。

「お礼ですよ。」

「お礼？」

「三万円です。すくなくともわかりませんが、今回はこれで我慢して下さい。」

S工業の社長は、当然のことのようにいつた。S工業は、株式会社だが、要するに個人経営にひとしいような中小企業であつた。

「冗談じゃアない。」

有沢修三は、憤然としていつた。

「すくな過ぎますか。」

「私は、こんな物を貰う理由がないといつてゐるんですよ。」

「でも、まアそうおっしゃらずに。私が誰にも喋る訳ではありませんし。」

「私は、そんなことをいつてゐるのではありませんよ。ただ、こういう物を貰つてはいけなし、その気もないといつてゐるんですよ。」

「しかし。」

「社長。」

有沢修三は、口調をあらためて、

「もし、どうしても取れとおっしゃるんなら私は、社へ帰ってこのことを課長に報告し、以後お宅との取引きについて考えさせて貰いますよ。」

S工業の社長は、あきれたように有沢修三の顔を見ていた。が、そのうちにやっと彼が本気でいつているのだとわかつたらしい。

「どうも、すみません。」

「これを引つ込めてくれますな。」

「その方があなたのお気に召すのなら。」

そういうとS工業の社長は、せっかく出した三万円在中の封筒を自分のポケットにねじ込んでしまった。それをじいっと見ていて有沢修三は、やっと落ちつくことが出来た。しかし、心のどこかに、

（惜しい……。せっかくの三万円……。三万円あったら相当飲めたのに……）

と、いう思いがなかったとはいいい切れなかったろう。

同時にこの分だと、S工業では、取引きの度にリベートを出していたのではなからうかとの疑問も感じた。今までのS工業の担当者は、仙台支店へ転勤したので、代りに有沢修三が担当することになったのである。だから、有沢修三にとっては、S工業とは初仕事であつたのだ。

「どうか、今のことは、お忘れになって下さい。」

S工業の社長がいった。

「そのかわりあなたの方でも、今後こういうことは一切考えないで下さいよ。あくまで取引きは取引きとして、フェアにいきましょう。」

「勿論、私の方だって、その方が有りがたいんですよ。正直にいつて、この三万円は、うちにとって、出すと出さないで随分と違うんですから。」

ちょうど夕刻になっていた。

有沢修三は、

「では、失礼します。」

と、帰りかけると、S工業の社長は、

「私も帰るところですから。」

と、いっしょに外へ出ると、

「有沢さん、近くのおでん屋でいっぱいおやりになりますか。」

「おでん屋？」

「だったらいいでしょう？ 勿論、さっきのことには関係なしに。私は、何んとなくあなたと飲んでみたくなつたのですよ。まさか、それまで嫌だとはおっしゃらないでしょう？」

そうまでいわれては、有沢修三も嫌とはいわれなくな

つて来た。酒が嫌いな方ではなかった。それにS工業の社長のいい方には、誠意のようなものがこもっている気もした。すでに五十歳を越しているのに、自分の商売が可愛いばかりに、まだ青二才といっている。有沢修三に對して下手に出ようとしている。心の中では、口惜しい思いもしているだろう。それがわかるだけに有沢修三は、さっきの自分のちょっと高飛車めいた態度に反省もさせられていた。

「おでん屋だったら。」

有沢修三は、その氣になった。

「それは有りがたい。これでおでん屋まで断わられたのでは、立つ瀬がないと思つていたんですよ。」

S工業の社長は、ほつとしたようにいった。

二人は、そのまましばらく歩いて、

「ここですが。」

と、S工業の社長がいったのは、本当に文字通りのおでん屋であつた。

おでん屋という口実で、実際には、もつとちゃんとした小料理屋ぐらゐに案内されるのではないかとの有沢修三のアテは、はずれたことになる。しかし、有沢修三としては、その方が氣が楽だったし、氣持もよかつた。

「結構ですよ。」

二人は、おでんを食べながら酒を飲んだ。有沢修三は、これでもビールなら半一ダスぐらゐ飲める方である。S工業の社長の方は、酒は好きだが、そう強い方ではないらしかつた。酔い方も早かつた。

「しかし、有沢さん。さっき、私は、恥をかかされましたよ。」

「あの話は、もうやめましょう。」

有沢修三は、てれたようにいった。

「でも、私は、あなたが好きになりましたねえ。本当ですよ。嘘は申しません。」

S工業の社長のロレッツがすこしおかしくなつて來ていた。

「みんな、あなたのような人ばかりだといひんですがねえ。」

「ということは、そうでない人も多いということですか。」

「どうも、有沢さんは、何んにもご存じでないようですね。」

S工業の社長は、奥歯にモノのはさまつたやうないい方をした。が、それだつて酔いにまかせての本心であつたかも知らないのだ。

「それはどういう意味ですか。」

「まア、やめておきましょう。」

「社長。せっかく口に出しかけて、そのままではしてまうなんていけませんよ。」

「そう、いけませんやね、有沢さん。」

「だったら……。」

「いえね、有沢さん。私がいいたいのは、あのリベートという奴は、一種の必要悪だということですよ。」

「必要悪？」

「お互いに持ちつ持たれつ。」

「……………」

「それで私のところのようなちいさな会社は、いろいろとたすかっているんですよ。」

「……………」

「でなかったらとうてい大きなところには勝てません。」

「しかし。」

「もうすこし、私に喋らせて下さい。ねえ、嘘って、嫌なもんでしょ。」

「そう。」

「しかし、嘘のない世界って、果たして住みいいでしょうかね。」

「……………」

「世の中の人間が全部正直者になってしまったら、あんな

た、そりゃア窮屈で呼吸が詰まってしまうですよ。」

「……………」

「夫婦間にも嘘は、時に必要なんです。ましてや、商売となったら、それこそ食うか食われるかの修羅場ですからねえ。」

「あなたのおっしゃりたいのは、さっき、私がリベートを取らなかったことについてですか。」

「いや、あなたは、立派ですよ。私は、一生とまではいいませんが、あと一年でも二年でも、今の純粹さを保っていて貰いたいと思います。本当です。」

「私は、あなたがおっしゃっているほど立派な人間ではありませんよ。結構、女遊びもしていますし、適当に嘘もついていきます。」

「問題は、別です。私のいいたいのは、リベートを取らなかった精神です。」

「……………」

「しかし、私の方からいうと、あんまり立派過ぎて、多少迷惑でもあるんです。」

「迷惑？」

「おわかりになりませんか？」

「だって、あなたは、さっき、あの三万円を出さないですめばたすかるとおっしゃったでしょう？」